

町誌編さん室の 島のむんがたり

徳之島町出身者から発せられた知られざる「奄美日本復帰の第一声」(1)

今年是我们奄美の群島民が異民族支配から解放されて68年目になる。毎年記念すべき奄美群島本土復帰の日が、なぜかわが徳之島においては影が薄いのが気になるので、先人たちの思いをたどってみたい。

軍政府に抑圧された貧しく重苦しい生活を強いられた中、徳之島の先人が自由に本土と往来し、本土並みの日常を送るために熱い思いで戦いを始めたのが終戦直後で

ある。

前田長英は大正10年(1921年)徳和瀬集落の開祖ネーマ家に生を受け、向学心に燃え上阪し、丁稚奉公しながら優秀な成績で大阪の高校を卒業、関西大学に入学するも体力が弱り志半ば帰郷。神之嶺と瀬戸内で教員をしながら徳和瀬青年団長として青年団を中心に島興しを決意、青年の娯楽のため演劇の台本づくりや島の歴史学習に自ら講師として活動。

昭和20年(1945)終戦によりアメリカ軍による「信託統治」を余儀なくされた。

翌年天城村で開催された徳之島各町村連合青年団の弁論大会で前田は、「頹廢の叫び」と題し雄弁をふるった。「何だそれは！」と数百人の聴衆を騒然とさせたのは結びの言葉であった。

異民族支配が歴史的文化的にも不当であることや、本土との交通遮断によって島の未来さえも奪

い取ろうとしていることの不当を「我々の生きる道は、復帰によって一日も早く祖国日本へ帰る道以

外にない」と訴えて第1位だった。これが徳之島における復帰運動の歴史的な産声とされている。終戦直後、しかも米軍政府統治下に置かれたその年に公然と島民の前で熱く「復帰」を訴えたのである。その後、軍政府の圧力が強くなり、前田をはじめ多くの青年団幹部が命がけで本土に脱出(密航)した。

京都の立命館大学に入学、夜間部で学ぶも病気療養退学。その間も創作活動を続け、『奄美大島脱出記』を発表、奄美人の窮状を訴え復帰運動への協力を呼びかけた。

昭和33年(1958)帰島。働きながら執筆活動を続け『黒糖騒動記』など多くの著書や、徳之島郷土研究会長として島の文化運動にも貢献した。

私たちにはこの先人の熱い血が脈々と流れている。将来の徳之島・奄美のために今私たちにできることはないだろうかと思わずにはいられない。

【町誌編さん室 岩下洋一】

問 郷土資料館
☎0997-82-2908



前田長英氏と妻の磯子さん